上海合璧と慈済の出会い。感恩！

花蓮慈済精舎

慈済病院の院長と記念撮影

慈済病院のボランティアたち

慈済見学で熱心に話を聞く

董事長と林智慧師姑らが記念撮影

呉添福師兄の感動的な講演

熱心に学習する参加者

2011嘉定区慈済
歳末感謝会の記念撮影

慈　済　と　と　も　に

頬杖をついて眺める夕日。まるで晩唐の詩人李商隠の詠んだ「夕日無限好、只是近黄昏（夕日は限りなく美しいが、ほどなく黄昏となる）」よりも儚い美しさ。自然の巡りはどうしようもありません。ただ、沈んでいく夕日に最後の別れを告げて手を振るだけです……。しかし、偶然にもわたしは新しい太陽を見つけました。永遠に沈むことのない太陽を。それは慈悲に満ちた大きな愛。決して沈むことのない愛。

「暗闇の中に射す明かり。寒空の下で焚かれた火」。明かりも火も愛の力を起こします。それは静寂の中に息づいているのです。その愛は野原を焼き尽くす最初の火種です。やがては世界の隅々にまで広がっていきます。国境を越え、貧しい人、苦しい人、困っている人を助け、人々の良心に訴えかけてきます。これが慈済の偉大な力です。

竹筒歳月(寄付するための細かいお金を貯めた竹筒を彼らで)

慈済の創始者証厳法師は慈済をはじめたばかりのころ、30人ほどの家庭主婦とともに毎日の食費の中から5毛（銭）を竹筒に入れて寄付しました。また、市場の物売りに5毛ばかりのお金で何ができるのかといわれたときは「毎日5毛で人を救うことができる」と答えるよう彼らに教えました。「毎日5毛で人を救うことができます」、このことばが広まり、「5毛の人助け」という運動が市場を起点にはじまったのです。彼らはいろいろなところでこの運動を続け、ついには慈善事業を行うまでになりました。証厳法師はいいました。「月に15元寄付するのと毎日5毛寄付するのではその意義が違います。わたしは皆さんに寄付をしてほしいわけではなく、決心してほしいのです。毎日善いことをするのだという」。こうして愛のモーターが動き始め、慈済の車輪が回り出しました。そしてやがて「慈善、医療、教育、人文」という慈済の四本柱になったのです。

慈悲と情熱にあふれた慈済人

貴重な台湾での8日間にわたしは慈済を知りました。それはわたしたちに大きな愛を注入しました。「自分のお金で他人を助ける」。そこには喜びがあります。その感覚はなかなか理解されがたいかもしれません。しかし、慈済の人たちの顔には無限の喜びがあふれています。まるで「慈済のクリームを塗ると笑顔になる」ようです。

2011年12月18日、嘉定区で慈済の年末感謝会があったとき、わたしは再び同じことを感じました。彼らの踊る「幸せの顔」という歌。軽快なリズムに思わずこちらも踊り出したくなります。彼らの踊りは決して上手とはいえませんが、とてもまじめで温かさが伝わってきます。踊っていたのは二十歳から五十過ぎの者まで、みんなとても元気に楽しく踊っていました。それを見て若さは年齢と関係ないと思いました。そして心の中で「わたしも七、八十歳になったとき、あんなふうにできたら幸せだ」と思ったのです。「幸せは欲望を少し少なくすること、ラララ……」。その歌声は今でも頭に浮かんできます。

この日、わたしたちは慈済がこの一年、世界各地で行った支援活動に関する記録映画を見たほか、証厳法師からお年玉をもらいました。「有難うございます」。わたしは映画の中で証厳法師の目の中に人を苦しみや困難から救おうとする大きな泉を見ました。それは人間のさまざまな憂鬱、悲しみ、嫉妬、恨みといったものを溶かしてしまう泉です。わたしが見た彼女の目の中の透き通った涙はまさに慈悲の心、そして慈悲の心の背後にある変わることのない、純粋な愛でした。「わたしには何もありません。命があるだけです」。菩薩のような、彼女のその声はその視線からあふれ出たようでした。わたしはそれを永遠に忘れないでしょう。

このあと2012年1月7日と8日には冬季物資の援助活動がありました。これは1000人の障害者のために行った活動ですが、この中でも慈済の心温まる言葉や思いやりを感じました。例えば、ゆで卵の殻を割るとき、机にぶつけたり卵同士をぶつけ合ったりするのではなく、箸で挟んで割っていました。障害者の人たちに物資を渡すときも跪いて両手で渡していました。また、彼らが物資受領の拇印を押したあとも、慈済の人たちは濡らした布で指を拭き、乾いた紙でもう一度拭いていました。こうした細かいところの気遣いにわたしは感動しました。こうした気遣いは台湾では当たり前なのか、それとも慈済独自のものなのかわかりませんが、わたしは学ぶべきことだと思いました。

もう一つ、わたしが驚いたことは合璧と慈済はよく似たところがあるということです。合璧の理念のひとつは「関心、関懐、関照（気配りと思いやりで接する）」で、董事長も日頃から感謝の重要性をわたしたちに教えていますが、これは慈済の教えと似ています。それに、椅子を動かすときは音を立てない、頬杖をついて食事してはいけない、外泊のときは翌朝部屋を掃除する、布団はきちんとたたむ、ビニール袋持参でゴミを拾う、ゴミ袋を広げるときは静かに、外出時の荷物は派手すぎる色にしない……。こうした日常の小さな教えもよく似ています。

こうした教えを慈済の先輩から聞いたとき、本当に驚きました。董事長の教えとよく似ていたからです。これらは合璧の社員にとって入社したときに教わる基本です。これらに会社以外の場所で偶然にも出会ったとき、驚きとともに感動を覚えました。そして董事長が何度も繰り返す言葉、それは多くの人に受け入れられる貴重な言葉だったのだと思いました。董事長、有難うございます。董事長の従業員に対する愛は思いやりであったり厳しさであったり、多くのことを教えてくれます。それは一筋の光、永遠に沈むことのない太陽の光です。

慈済の愛は永遠に沈まぬ太陽。その光は慈済人の血、時間、精神力……。

捧げるのは自分の財産、残るのは他人への尽きることのない愛。

董事長、わたしたちは慈済に入りました。100人の同僚とともに、愛の列に加わります。有難うございました。

上海合璧総務課
李高燕特助

HOPPY

合璧流

不斷地思考與行動
誠信蛻變創新卓越
創造價值共生共榮
感謝報恩回饋社會

2012/01
第12期 01月10日發行

出版社：合璧文化基金會　發 行 人：詹其力　編輯指導：陳慶煜、詹杰文
總　編：王迎春、林生富　編輯委員：李高燕　印　刷：上海綜禾印刷有限公司

人が資本の優良企業　上海合璧公司訪問の感想

一、はじめに

2011年4月、わたしは妻とともに友人を訪ねて上海を訪れました。妻は合璧の董事長の姪にあたり、二人はいっしょにひとつの弁当を食べたこともある間柄です。ということもあって、今回の旅の中では、わたしもずっと行きたいと思っていた上海合璧を訪問する機会に恵まれました。

清明（新暦4月5日ごろ）の上海は暖かかったり寒かったり、道行く人もまだ冬服を纏っていました、道端の木々は新芽をつけ、微かに春の訪れを告げています。連休のせいもあってか、街中もめずらしく渋滞はなく、そのためわたしたちは余裕をもって合璧に到着しました。そのときわたしの見た合璧はきっちりと落ち着いた雰囲気がありました。

李家（妻の一族）では、董事長の奮闘は見習うべき模範となっています。また彼の親族への思いやりに対しても、みんな感動しています。わたしは合璧の創立と発展の過程については詳しくありませんが、董事長の経営理念についてはよく知っているつもりです。なぜなら、わたしがまだ労工研究所に就学していたとき、台湾合璧公司に関するレポートを書いたことがあるからです。レポートの主な内容は労働に関するもので、董事長の経営管理哲学について書きました（このレポートは労働問題を論ずる月刊誌に掲載されました）。

洪清海さん夫妻

三十年前、合璧は台北近郊の三重仁愛路の路地に隠れるようにありました。製品の競争力はあったので、徐々に頭角を現してはいましたが、何分にも会社規模が小さく十分な収益を上げてはいませんでした。そんな中、わたしがはっきり覚えているのは、董事長が自身と社員の教育をたいへん重視していたことです。人に対する投資を惜しまず、これが後の合璧の発展につながる重要な鍵だったように思います。正直にいって、当時の合璧はまだ完全な経営理念が構築されていたとは思えません。ただ、そんな中にも「人が資源」という概念がすでにこの時期、実際の管理の中に見られました。これは中小企業においては極めてめずらしいことです。

二、人が資本

合璧が人的資源の開発と運用を重視する背景には董事長の教育と訓練に関する体験が影響しています。董事長は創業当時、まだ若かったころからさまざまな研修やセミナー、教育トレーニング等に参加して、多くの分野の専門家の知恵と経験を学んできました。そして「海納百川、不捐細流（海は多くの川を集める。小さな流れも捨てはしない）」。決定や管理の実力をつけてきたのです。さらに、董事長は自らの学んだことを他の人に教えたり、幹部を教育トレーニングに参加させたりもしています。これによって会社は春のワラビが延びるように成長し、日増しに業績を上げていったのです。

人材伝承を願って植えたイチョウと柳

ある学者が企業の「企」という字について、「人が止まる」、つまり人がそこに留まってこそ企業として成り立つというのを聞いたことがあります。この解釈が正しいかどうかはさておき、それでも企業にとって人がどれほど大事なものか、納得させられるところがあります。しかし、残念なことに、多くの学者や専門家、経営者、管理者の人に関する考えは機能性と戦略性を基点にスタートします。組織と目標の達成のみを重視し、従業員を企業の核心とは見なしません。彼らにとって従業員とは制限できるものであり、激励できるものであり、コントロールできるものである、つまりは道具に過ぎないのです。確かに人的資源は組織的な管理の下でこそ効果を発揮するものだと思います。ただし、雇用関係の中における従業員の従属性については管理上の合理性と必要性の中でのみ必要なもので、従業員の人格における主体性や独立性、つまりは存在そのものの価値が軽視されることがあってはならないと思います。

わたしはこれまで労使研究、教育、行政に関する仕事を何年も行ってきました。この期間はちょうど台湾の労使問題の転換期に当たり、大型の労使問題を解決するため同僚とともに現場の第一線に赴きました。そこで感じたのが、多くの大企業が労使問題を軽視し、横柄で冷酷に扱っていたということです。驚くことに、そこには人が資源だという考えは見られませんでした。こうした労使問題を解決していく中でわたしが学んだことは健全な労使関係こそが企業の永続経営の基礎だということです。そして健全な労使関係を築く最大の鍵が労働価値の肯定だということです。経営者や管理者は労働者に対して敬意を払ってこそ完全な制度が構築できます。公平で理にかなった対応、友好的な職場の創造、従業員の成長の支援、これらがあってこそ、企業は永続経営が可能となり、社会責任を果たすことができるのです。

今回の訪問で董事長は人材募集に対しても自信を見せていました。中国では近年労働市場で深刻な需要と供給のバランス崩壊が起きています。賃金が上がり、労働力の欠如が続く中、企業は安定した労働力の確保のために内陸化の傾向を見せていると聞きます。しかし、上海合璧は労働力確保の競争が激化する中でも独自のスタンスで対応しています。これには従業員への重視、価値の創造、魂の美化と密接な関係があると思います。合璧の従業員は自分の価値が認めてもらえ、自分が成長するとともに企業も発展していくことを実感しています。従業員がこうした企業と将来に向かってともに歩んで生きたいと思うのは自然なことです。

「よい製品を作る前によい人材が必要です。わたしはそのためによい環境を整え、大量の人的、物質的資源を投入し、系統立った教育トレーニングを行っています。わたしは皆さんのお子さんに決められた給与や賞与のほかに感謝の理念を与えてきました。禅の5Sで彼らの魂を美化し、ともに合璧のよい環境を作ってきました。合璧の精神によって従業員やその家族、ひいてはこの社会全体に貢献していきたいと思います。わたしはこれが企業の最終目標だと思っています」

これは董事長が今年の正月に従業員の親たちに宛てた手紙です。ここからは74歳の起業家の従業員に対する心遣いと期待、そして人は資源であるという価値観が見て取れます。わたしは合璧の管理制度について詳しいわけではないので、実際の運用状況についてはわかりませんが、それでもこれほど人を重視する企業が目指しているのは間違いなく「巨大」ではなく、「偉大」だと思いました。

台湾台中　姪の婿　洪清海

利益の創造は企業の經營過程、「價值創造、共生共榮、感謝と恩返し、社會への還元」、これこそわたしたちの最終目標。